

ますが、私はある程度自分で開発したりしています。

N それは、本来は下がるはずだが、レッスンの方法で高い声をキープしているのですか。

M そうです。低い方が出るようになれば、高い方も自然に出てくようになります。高い方の出し方がわかってくると、低い方の出し方もわかってきます。そういうことで私は音域が広がっています。

即興で奏でるジャズと即興の境地に至った演出

N 最近の森山さんの活動を見ていると、伸びやかで、恐れないで伸び伸びしているっていいよなあと思いますが、本当にそう受け取っているのか、それとも「蜷川さん、私だっている苦労があるのよ」という反論はあるのですか。

M いえ、恐れはないです。とにかくチャレンジしてみるというか、例えばジャズを歌う時に即興でアドリブをするわけです。ミュージシャンは毎日毎日アドリブがどのくらいの所までいっているか、死にものぐるいで自分の一番格好いい音を探していくというプレイを

最近では僕の演出も即興演奏のよう。 それはようやく僕が到達しかかっている 自由な境地です。

しています。そういうジャズミュージシャンの人たちとここ数年仕事をしていますが、彼らのプレイぶりに私も負けたくないと思っています。もし変な所にいってしまったら、そのイメージしたものを歌ってみるという事がすごく大事ですし、もちろんメロディーラインをきちっときれいに歌っていくものもありますが、ジャズ的な要素でこの歌を唄ってみようと思った時は、自分が今までに飛んだことがない場所の音に自分を弾ませて持っていくという、そういう行為は日々繰り返して行っています。そこが楽しいです。

N ジャズはそういう基本的なメロディー、リズムの運びは別として、即興でつないでいくとかセッションしていくとかそういう要素は多いものですか。

M 全てがそうです。絶対に昨日とは同じ演奏はしないという彼らの哲学のようなものがあります。

N どう出られても、それをキャッチして、「こういぞ」というのは計算ではなくて、身体的、生理的な反応に近いようなものになっていくわけですね。

M そうですね。最初のうちはなかなか音が取れなかったりする事がありますが、何度か繰り返していくと、音が飛ぶ動機というかそれが少しずつわかっていきます。それはとても不思議なのです。ときどきジャズライブツアーをしますが、普段歌っていないいきなり「ボン」とジャズに入るとすごく怖いのです。だからいつもその中に触れていると、「ボン」と何かを放られた時に即座に「ふん」と返すことが出来ます。

N 僕の演出は何かというと全部決めて、意に沿わないと物をぶつけて、眉間に青筋を立ててと言われますが、最近では即興演奏みたいなのです。「では、柳の木のセットにします」と言うと、みんなでどんな柳にしようかなあとか、小道具、照明などが勝手に作って、「色はどうします」と聞いてくるので、「淡いのにしてくれる」と言う。それぐらいの打合せにしかしてないのです。言ってみればほとんど即興で進んでいくのです。それはようやく僕が到達しかかっている自由な境地であるし、ジャズのように優れたプレイヤーの方がいっぱいいるので一緒に遊べるし、みんなが自在に自信を持ってやり始めて、チームが動く楽しさが最近ようやくわかってきました。一応は成長しているのです。

M ああそうですか。今まではいかがだったのですか。



N 120%紙の上で作って、ノートに約1mmぐらいの字で、「照明、フェイドイン。何々動く。どこの誰がどういう顔してどっちに行った……」そして絵が描いてあって、動きが書いてありました。しかし最近では始めから終わりまで何も台本には書き込みがなく、何の痕跡もないのです。その時の頭の中にしかないのです。ただ「おい、行こう」とやっているだけなのです。だからすごいですよ。

M 乱暴者ですね。

N そうですよ。

僕らは才能があるのか大したことないのか

N 話が飛びますが、森山さんは作曲はいつなさるのですか。

M 作曲は深夜にします。深夜にならないと始める気がしないのです。締め切りまでにこういう曲を作らなければいけないというのがあるのですが、辺りが静まって深夜になると、「さあ、作らなければ、作らなければ……明日から」というみたいな感じですが、それがすごく長いこと続くのです。それでメロディーの破片だけを繰り返し、繰り返し何かをしながらかでも覚えておくのです。「出だしのメ

ロディー」と「さびのメロディー」だけは自分の中でいたい出来ているのです。

N 部分的に出来ていくのですか。

M そうなのです。こういうふう始めて、さびの所はこういう感じにしようというのは空で考えるのです。それを考えた時に、「出来たのも同然!」と思っちゃうのです。ところが締切りの前日とか前々日になっていざテープを回して作曲し始めると、頭とさびが出来ているのにどうしてもその先が出来なかつたりするのです。

N そういう時間にお酒を飲んだりはしないのですか。

M お酒を飲んでいる時もありますが、お酒を飲んでいる時は、すごく自惚れた気分になっているので「最高!」と思うのですが、次の朝に聞いてみると、すごくへぼさんだったりするのです。



N 真夜中に書いたラブレターが翌朝読むと、ダメなのがありますよね。

M そうですよ。思いがグーッと入り過ぎちゃって。

N 僕はこの頃よくあるのですが、これは絶対いけると思っていたのが、翌朝に忘れていたのです。「ああ、書いておけばよかった」ということがありますか、そういうことはありますか。

M あります。それは絶対に年のせいではありません。私も昔からそうなのですが、「このフレーズ最高。これは忘れるわけがない」と思って書き留めないのですが、次の朝、見ると結構ありきたりのフレーズだったり、まったくかけらも思い出せなかつたりです。それはひらめいた時に、そのまま何かに写しておかなければいけないのです。気をつけましょう。

N もしかしたら、僕らは才能があるということかもしれません。もしかして次の朝見たら、大したことないかもしれない。

M こういう対談とかでしゃべるだけだと、どきどきします。歌を唄うととても落ち着くので、一曲唄わせて頂いてもよろしいでしょうか。(拍手)

N 喜んで。こんな贅沢な。皆さん、いいですよ。

〜♪(ギターの弾き語りで)『涙そうそう』〜 (拍手)

N どうもありがとう。すごく得した気分で、やはり素敵だった。芝居は歌に負けるなあ。たった3分で僕らの2時間分ぐらいで、やられるなあという感じ。でも強いよなあ。

M 私も先生のお芝居をいつも隅から隅まで凝視しながら楽しませて頂いております。

実はこの前インドに行ったのですが、インドの下町の所を歩いている時に蜷川先生の舞台のイメージとすごく重なったんです。先生の舞台の上の人間模様はとても多彩で、色もありとあらゆる色があり、富めるもの貧しきものの差をいろいろと表現されていますが、インドに行った時に映像として、「蜷川先生のお芝居に出てくるような風景だ」という感じがしました。

N インドはいかがですか。みんなが「あなたは、インドはダメだ」と言うのです。あまりにも汚すぎてダメなんではないかと言いますが、そんなことはなかったですか。

M すごく汚いです。

N 何でそんなに平気なの。

M 平気ではないのですが、とにかく生ものはダメ、生野菜も

ジャズでは即興で、 今までに飛んだことがない場所の音に、 自分を弾ませて持っていきます。

水で洗ってあるから食べてはいけないとか、旅行者にすごく規制が多かったのです。でも見る物全てが生まれて初めてというか、戦後すぐの日本が入り混ざっているのですが、見たことのない光景が次から次へと現れてくるので、「ええ!ええ!」と言っている間に10日間たちました。

N 僕は偉そうに見えるけど全然ダメなんです。怖がりなので、虫がダメです。泥の中を歩くのは子供の時から、ダメです。フィクションだと平気なのです。そういうのは好きだから一生懸命がんばって作るのだが、実物はダメだね。森山さんは勇気があるんだね。

M そうです。何でも興味があります。

蜷川先生もう一曲唄ってお別れしてもいいでしょうか。きょう集まって頂いた皆さまと蜷川先生にお贈りしたいと思います。

〜♪(手のひらで小さなオルゴールを奏でながら『——Eternally ~エターナリー』〜 (拍手)

N 今日は爽やかな空気に触れて、ちょっと幸せな気分で帰ることが僕たちは出来ます。ありがとうございました。

